

町屋光明寺 落慶記念

本願寺・寺宝展——「東本願寺と江戸幕府」

①葵御紋付団扇	あおいごもんつきうちわ
教如上人が下野国の小山（現在の栃木県小山市）において家康公より拝領した。慶長5年（1600年）7月の関ヶ原合戦前夜（現代に使用されている新暦では9月1日と言われている）、会津の上杉景勝を征伐に向かう途上で小山に在陣中の家康公を教如上人が訪ね、面談した際に餞別として拝領し、このとき教如上人は石田三成挙兵の知らせをもたらしたと伝えられている。安土桃山時代の軍配団扇で現存するものは極めて少なく、非常に貴重な品である。	
⑦櫻欄蒔絵鏡	しゅろまきえあぶみ
⑧櫻欄蒔絵鞍	しゅろまきえくら
「葵御紋付団扇」(①)とあわせ、家康公が乗っていた馬とともに拝領した品々である。	

②成然上人消息 箱東照宮御寄付	じょうねんしょうにんしょうそく はことうしょうぐうごきふ
親鸞の弟子である成然が、妙安寺に安置されていた親鸞聖人御真影のいわれをしたためた手紙。聖人が関東を離れる際に妙安寺の開基・成然に授けた自刻の御真影であると記されている。教如上人が家康公より拝領し、現在は旧東本願寺の御影堂に祀られている。	
③家康公御消息	いえやすこうごしょうそく
家康公から本願寺に対して出された、京都に入る織田信雄（おだのぶかつ）の処遇についての指示書。慶長19年（1614年）のころに書かれたものと思われ、大坂冬の陣直前の信雄の不可解な行動（豊臣方の総大将になるとの噂がありながら徳川方に転身した）を裏づけるものではないと言われる。	
④御厨子御用意ノ鍵 葵御紋付桐箱入	おんずしごよういのかぎ あおいごもんつききりばこいり
慶長7年（1602年）の東本願寺（旧東本願寺。現・真宗本廟）建立時、家康公から教如上人に送られた、妙安寺安置の親鸞聖人御影が納められた厨子の鍵。ここでいう親鸞聖人御真影は「成然上人消息 箱東照宮御寄付」(②)に書かれたものを指している。	
⑤御厨子海老鎖鍵 道忠作	おんずしえびくさりかぎ みちたださく
親鸞聖人御影が納められた厨子の錠(④)の複製。教如上人が御真影を頂いたことを喜び、つくらせた。	
⑥常葉御影御開扉御弘通ノ節御依用ノ錠 竝箱トモ	ときわのごえいごかいびぐづうのせつごえようのかぎならびには ことも
親鸞聖人の孫・唯善（ゆいぜん）により、宗祖御廟（京都・大谷）から持ち出されたとされる聖人木像（常葉の御影）の開帳時に納められていた厨子の錠。木像は江戸時代に入り発見され度々開帳されていたが、現在は多くの逸話を残したまま行方不明になっている。	
⑧日課名号	につかみようごう
家康公は六字名号（南無阿弥陀仏）を書写することを日課としており、その際に書かれたものが各所に残されている。一箇所だけ「南無阿弥陀家康」と書かれている。	

⑨東叡山、毘沙門堂 開基久遠壽院公海僧正筆 東照宮神像	とうえいざん、びしゃもんどう かいきくおんじゅいんこうかい そうじょうひつ どうしょうぐうしんぞう
教如上人の外孫で南光坊天海大僧正の後継者として三山管領に上り詰めた公海大僧正の手による家康公の肖像。公海大僧正は晩年京都山科に戻り、毘沙門堂を再建して住持した。第十三世・宣如上人、第十四世・琢如上人とは非常に親しい間柄であった。三山管領とは比叡山延暦寺天台座主、上野東叡山寛永寺貫主、日光日光山輪王寺門跡を兼務する江戸期における日本仏教界の最高職であり、後には宮宅出身者や皇子のみが就任できる地位である。慶長12年（1608年）に生誕した公海大僧正は、元禄8年（1695年）に88年の生涯を閉じた。	
⑩東照宮御消息	とうしょうぐうごしょうそく
本願寺からの献上物に対し家康公が書いた礼状。「太刀や馬等を献上賜り有難う」といったことが書かれている。	
⑪板倉伊賀守ヨリ境内御判物ノ添状	いたくらいがのかみよりけいだいごはんぶつのそえじょう
東本願寺寺地の安堵を約束する家康公の書状が出されたことを本願寺に知らせるためのもので、家康公の重臣であった板倉勝重から東本願寺坊官・粟津大進元隈に手渡された。	
⑫慶長七年三月九日妙安寺へ葵御紋幕ヲ 賜フ本多佐渡守奉書	けいちょうしちねんさんがつこのかみょうあんじへあおいごもんまくをたもうほんださどのかみほうしょ
東本願寺建立の際、親鸞聖人の直弟子であった成然坊の開いた妙安寺（茨城県）に安置されていた親鸞聖人自刻の御木像を家康公が召し上げ、教如上人に寄付した。その褒賞として幕府は妙安寺に葵紋使用の特権を許可し、この手紙を送った。	
⑬十三境和歌 松平定信筆（紙本墨書）	じゅうさんきょうわか まつだいらさだのぶひつ
「寛政の改革」で有名な幕府老中であり、東本願寺とも交流のあった松平定信（1759-1829年）が残した和歌。定信は文人としても多くの足跡を残している。	
⑭涉成園十三景詠詩 大窪詩佛（絹本墨書）	しょうせいえんじゅうさんけいぎんし おおくぼしぶつ
江戸時代後期の漢詩人である大窪詩佛（1767年-1837年）が本願寺の別邸であった涉成園の十三景について詠んだ五言六句。松平定信に『日本外史』を献上した頼山陽（らいさんよう）の『涉成園十三景詩文』に応じ、文政10年（1827年）秋に奉じた。東本願寺を舞台に、東西を問わず多くの文化人や学者、政治家が交流していた証である。	
⑮御五条袷	おんごじょうげさ
徳川家をあらわす葵紋と大谷家をあらわす牡丹紋が交互に存在する非常に珍しい袷。幕末、幕府劣勢の時期につくられており、本願寺は幕府を応援するという意思が織り込まれている。	
⑯東照宮御廟之霊牌	とうしょうぐうごびょうのれいはい
かつて東本願寺内に存在した東照宮に祀られていた徳川幕府歴代将軍の御位牌。江戸幕府第10代将軍・家治の長男であり、第11代将軍として将来を期待されながらも夭折した家基（いえもと）の位牌（孝恭院）も含まれている。	
⑰舊幕府徳川家御位牌安置ノ義何書へ 付紙ヲ以テ御沙汰書	きゅうばくふとくがわけごいはいあんちのぎうかがいしょへつけがみをもってごさたしよ
明治維新時、朝廷の敵となった徳川家と緊密であった東本願寺が位牌(⑯)を祭祀することは、自ら敵視されかねない危険なことであった。そのため、この書面をもって安置を続けてよいかを新政府に確認し許可を得た。朱書の「付紙」は新政府側による回答であり、「其儘ニテ宜し（そのままよろしい）」と書かれている。	